

フィールドワーク便り

名にし負わば

— ルグバラの人びとの名づけから思うこと —

山 崎 暢 子 *

はじめに

見知らぬ人ばかりの土地で誰かと顔なじみになるまで毎日が自己紹介の連続になるというのは珍しくないと思う。会うひとと会うひとに私は日本という国からやってきた学生であり、この地域の文化や言語を学びに来ているのだとひととおりに説明する。そしていざ名乗ると、かなりの頻度でげん顔をされた。私の「Nobuko」という名前がおぼえにくいとのこと。どうやって発音していいのかわからない、とか、むずかしい名前ね、とか言われたりする。それからたいていふたこと目には、次のような質問が飛んでくるのだ。—「あなたはクリスチャンかムスリムか、あるいはヒンドゥー、それとも…」、つまり、信仰を表明する名前をもっていてしかるべきだという意識が相手にはあり、私の日本語名だけでは信仰を判別できないというのだろう。私の「奇妙な」名前に対してなんであれ興味をもってくれた人からは「あなたの

名前にはどんな意味があるのか」と尋ねられることもあった。そんなとき私が口にするのは、名前に込められた意味、「この子がこうあってほしい」といった親の願いであり、がいて「良い」意味についての説明であった。これは、サハラ以南アフリカでひろくみられる名づけとはずいぶん様子が違っているようなのだ [梶 1985; 木村 1996; 小森 1999; Sugawara 2016]。

地域概要

私が訪ねて行ったのは、東アフリカのウガンダ共和国北西部で「ウェスト・ナイル」とも呼ばれる地域であり、¹⁾ 行政的には 9 つ (2017 年 8 月時点) の県が含まれる。この地域は、北を南スーダン共和国 (以下、南スーダンと記す)、西をコンゴ民主共和国 (以下、DRC と記す) と国境を接していて、日用品や農産物を売買する行商の通り道になっているため大小さまざまな市場が点在する。ア

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 筆者は、2016 年 7 月から 2017 年 1 月にウガンダ共和国で調査をおこなった。本稿の内容はおもにこの期間に得られた情報に基づいている。本稿に登場する人の名前の解釈については、あくまで現地の人の日常レベルの理解についての聞き取りをおこなっており、筆者自身の分析は言語学的に不十分な点が多い。また、忌避名やあだ名、双子につけられる名前などについては、今後の課題である。

ルア県を中心として、多くの住民がルグバラ (Lugbara) という民族集団の出自であり、DRC 北東部や南スーダン南西部に親族がいる人も多い。ウガンダ国内のルグバラ人口は 110 万人とされる [UBOS 2014: 20].²⁾

主たる生業は農業である。地域差はあるが、キャッサバ (*gbanda*) やソルガム (*ondu*) がほぼ全域で栽培されている。年間降水量は約 1,250 mm で、10 月おわりから 2 月はじめにかけて乾期をむかえる。この地域では、食事のソースに用いる「葉物」の種類が多く、カボチャの葉を用いたり、DRC の国境近くだとキャッサバの葉をヤシ油で炊いた料理が供されたりすることもある。とくに印象的だったのは、大きさ 20 センチほど、ときにはそれ以上にもなるアボカドの熟れた果実 1 つがたった 200~300 ウガンダ・シリング³⁾ だったことだ。また、ウガンダ国内有数の蜂蜜の産地であるほか、近年はヨーロッパなどでの需要の高まりからチア・シードの栽培が一部地域で試験的に始められている。

交易に携わる人をはじめ、教育を受けるために多様な民族の人びとが国内外からこの地域に出入りしている。近隣には、マディ (Ma'di) やカクワ (Kakwa), アルル (Alur) などの民族集団の人びとが暮らしており、民族をこえた通婚はよくみられる。また現

在、内戦状態の南スーダンからウガンダへは新たにおよそ 52 万人が避難してきており [UNHCR 2016: 8], 「ウェスト・ナイル」では 5 つの県に難民定住地が開設され、医療や教育支援などさまざまな人道機関も活動している。⁴⁾

その名前がうまれるまで

さて、ルグバラ社会における子の名づけは、産みの母によっておこなわれることが多い [Middleton 1961]。私が今回の調査中に集めたわずか 100 名弱の名前をみても、母が名づけた事例が多かった。Dalfovo [1982] がいうように、ある名前が示す字義どおりの意味のほかに、名づけた当人を取りまく具体的な出来事を指す意味があり、後者に込められたメッセージは実際に話を聞いてみないことには分らない。

マラチャ県に暮らすルグバラ農家の事例をとりあげてみよう。世帯主は 40 代男性 (A さん) で、第一夫人 (B さん) とのあいだに 7 人、第二夫人 (C さん) とのあいだに 4 人の子どもがいる。

とりわけ際立っていたのが、C さんの第三子の「Polisimuke」⁵⁾ という名前だ。Polisi は「警察官、警察署」を意味する名詞、muke は「良い、妥当な」という意味の形容詞⁶⁾

2) ルグバラ語は、ナイル=サハラ語族のうち中央スーダン諸語に属す。ただし、同じ「ルグバラ」といっても地域によって単語レベルで異なる「方言」があり、私が「ルグバラ語を学びたい」と口にしうものなら、「どのルグバラ語のことを言っているのか」「あなたのルグバラ語の先生はどこのルグバラだい」と問われることが度々あった。

3) 3,500 シリング≒1 米ドル≒102 円 (2016 年 9 月時点)。

4) 筆者は「ウェスト・ナイル」地域で、2014 年と 2016 年に難民やその支援機関の職員、そして難民を受け入れている地域住民について調査をおこなった。

5) 英語の police から派生した名詞。

で、字義どおりには「良い警察」となる。命名の由来は以下のようなものである。CさんはAさんと結婚する前に、すでに別の男性と結婚しており、その夫は彼女の親族に対して婚資の支払いをすべて終えていた。本来ならばその夫のもとを彼女が去るというのは社会的に好ましくないことだが、彼とのあいだで長年、子宝に恵まれなかったのだという。そこで彼女は秘密裏に別の男性、つまり現在の夫であるAさんと逢瀬を重ねるようになった。あるとき、ことの次第が発覚してしまい、AさんとCさんは、Cさんの前夫とともに警察に呼び出された。事情を聴いたうえで警察はCさんに、夫のもとを離れてAさんのところに行くのが良いだろうと告げたという。ただし、彼女は手放して喜んだわけではなかった。彼女は第一子を「まさか、願ってもいなかった、奇跡のようだ」という意味の「Taliru (*tali*=miracle (名詞), *-ru*=like (接尾辞) → like a miracle)。または, *taliru*=milaculous (形容詞⁷⁾)」と名づけている。この名前には、前夫のもとを離れたとはいえ、「またしても妊娠できなかったらどうしよう」「やはりダメなのではないか」という彼女の不安と、今度こそはとの期待とが入り混じった感情が込められている。第二子には「Wa'diko (*wa'di*=relative あるいは

kinship, *ko*=no → no relative)」という名がつけられているのだが、これは、Taliruを授かったのはまさに奇跡であって、「もうそれ以降は望めないかもしれない」「生まれてきてもすぐに死んでしまうかもしれない」と彼女が不安になりはじめていたことによるという。第三子を出産してようやく、彼女の強い不安は緩和され、「あのときの警察の判断は正しかった」のだと確信に至り、Cさんはその子をPolisimukeと命名したのだった。

名づけの今むかし、そしてこれから

ところで、調査を手伝ってくれていた青年にあるとき、「日本の名前を僕にもなにかつけて」とせがまれた。「う～ん。きみにぴったりの名前？」私は日本の名前をぼつぼつと思い出してみるが、どの名前も人物と対になってしまっていて、そのどれもがしっくりこない。かといって、てきとうな名前もつけられない。「いいのが見つかったら、今度つけてあげよう」と私は返す。「なんでもいいんだけど、何かないの、いまパッと思いつくの」と彼は笑いながら「約束だよ」と念を押す。さらにつづけて「そういや僕のルグバラの名前の意味、知ってる？…『侮辱』だぜ」と言うので、私は尋ねる。「それは、あなたのお母さんがつけたの、それともお父さん？」

6) 同形で名詞になることもある。

7) ルグバラの名前では、接尾辞として女性名には「-ru」が、男性名には「-a」をつけることが多い。このTaliruという名前が形容詞 *taliru* (=miraculous) 一語なのか、あるいは、名詞 *tali* のあとに接尾辞 *-ru* がついたものなのかについては確認できていない。後述する Ayikoru という名前についても、名詞 *ayiko* (=happiness, joy) と接尾辞 *-ru* に分けることもできるが、*ayikoru* (=happy, joyful) という形容詞も存在する。この Ayikoru と Taliru はいずれも女性につけられるのが一般的である。なお、接尾辞の *-ru* は、名詞のあとにつづいて形容詞化させたり副詞化させたりする働きももつ。

「知らない。訊いてみたこともない。なんに
したってこんな名前、もう時代遅れだよ。僕
に子どもができたら、やめにしたいね」と
やはり笑っていた。彼のルグバラの名前は
「Edema」といい、これは *ede* (=insult)⁸⁾ と
ma (=me) とに分けられる。彼は5人兄弟
の末っ子で、兄や姉の名前はそれぞれ「居
場所がない」「よそ者あつかい」「つれない
夫」「貧乏くじ」だ。当時、彼らの父母に何
があったのかについてはここでは割愛する
が、いずれにしても決して喜ばしい内容では
ない。この青年だけではなく、こうした「伝
統的」な名づけにたいする消極的な意見は、
ちらほらと聞かれた。若い世代が名づけにつ
いてどのような意識をもち、実際にどのよう
に子を名づけているのかは今後の調査のなか
で聞いていきたい。

ひょうひょうと

私は、現在のルグバラ社会で高名な年長者
から「Asianzu (平和)」というルグバラの名
前を頂いた。初対面のときに私は、たどたど
しいルグバラ語で、御年93歳になる彼に挨拶
をした。それを聞いて喜んだ彼は「あなた
にこの名をあげましょう」と、慣れた様子で
命名してくれた。ただ、その名づけは私に
とって、あまりに唐突であり形式的なものに
感じられた。まさかたった一度会っただけで

そんなにやすやすと名前をもらえるものなの
か。彼は「ルグバラ文化」にかんする式典が
催される際には必ず招かれるような人物で、
もともと教師をしていた。わざわざ外国か
らやって来て彼と会いたがる「白人」は私
だけではないらしい。はじめ彼は、「Ayikoru
(幸福、歓喜)」と口にしたが、「あ、これは
ダメだった」と言い直して Asianzu を私にく
れた。Ayikoru という名前を彼がすでにほか
の人に授けていたということは、後日、彼と
再会したときに知ったのだった。

ルグバラの友人に何か名前をくれと頼まれ
れば、私はその人に「良い」名前をあげよう
とこだわっていた。また、自分自身について
は、たとえ「綺麗」で「良い」意味をもつ名
前でなくても、その名にまつわる「エピソード」
にちなんだ名前一よくもわるくもそこに
関わる人たちとの物語や出来事を思い出させ
てくれる名前一をつけてもらうことを、私は
どこかで求めていたことに気付いた。

名前の由来、とくにとんでもないいわれに
ついて話すときにルグバラの人びとは、それ
が自分自身や近しい人の名前であっても、笑
いながら由来を語った。不幸を笑うなんてデ
リカシーがない、もし自分の名前が笑いもの
になどされたら恥ずかしい、と最初は感じた。
けれども、彼らは当事者をバカにしているの
ではなく、名前を、誰もが多少なりとも同じ

8) このときの会話で本人は *ede* を *insult* (動詞) と訳していた。ルグバラ語の辞書によると、*ede* は *belittle* (動詞) や *despise* (動詞) を意味する。*ma* は主格と目的格のほか、所有格を表すこともある。*ma* が主格の場合の語順は *ma ede* となるが、人の名前として *Maede* というのはほとんど聞かれない。本稿では、目的語をとる他動詞 *ede* のあとに代名詞 *ma* がきていて考える。なお、声調の違いによって *ede* という単語自体はほかに、*clean* (動詞) を意味する場合がある。ルグバラ語の声調は「高」、「低」、「中」と区別され、単語によっては「上昇」、「下降」の区別があるが [Barr 1965: 14]、本稿では声調符号を省略している。

ような体験をするのだと確認する媒体として用いているのかもしれないと思うと、見方は変わった。ともすると湿っぽくなりがちな話題を、災難にみまわれた人自身が「なんてことないさ」と笑ってのける、あるいは「笑ってなきゃやってらんない」といった具合にやりすごしているかのような彼らのユーモアともいえる感覚は、悪くないと思うのである。

引用文献

- Barr, L. I. 1965. *A Course in Lugbara*. Nairobi, Kampala, Dar es Salaam: East African Literature Bureau.
- Dalfovo, A. T. 1982. Lugbara Personal Names and Their Relation to Religion, *Anthropos: Revue Internationale D'ethnologie et de Linguistique* 77: 113-133.
- 梶 茂樹. 1985. 「テンボ族における個人名一言語人類学的考察」『季刊人類学』16(1): 47-88.

- 木村大治. 1996. 「ボンガンドにおける個人名」『アジア・アフリカ言語文化研究』52: 57-79.
- 小森淳子. 1999. 「ケレウエにおける個人名と忌避名」『スワヒリ & アフリカ研究』9: 21-43.
- Middleton, J. 1961. The Social Significance of Lugbara Personal Names, *The Uganda Journal* 25(1): 34-42.
- Sugawara, K. 2016. Personal Name as Mnemonic Device or Conversational Resource: An Ethnographic Study on the Naming Practice among the GÇ ui and GÇ ana San (Natural History of Communication among the Central Kalahari San), *African Study Monographs*, Supplemental Issue 52: 77-104.
- Uganda Bureau of Statistics (UBOS). 2014. *National Census Main Report*. Uganda Bureau of Statistics.
- United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR). 2016. *South Sudan Regional Refugee Response Plan*. United Nations High Commissioner for Refugees.

現代ヨルダンによる宗派・宗教間対話のイニシアティブ

池 端 蒨 子*

2016年8月、私は2年ぶりにヨルダンのクイーン・アリア国際空港に降り立った。空港の出口には、首都アンマンの中心部まで旅行者を運ぶタクシー運転手がわらわらと群がり、定価の数倍の値段をふっかけてくる。2年前に初めて訪れた際には押しの強い彼らに

翻弄されてしまったが、今回は彼らの波をうまくかわし、バスでアンマンへと向かった。

今回の調査では、21世紀以降ヨルダンが国家主導で推進する、宗派・宗教間の対話を模索する運動を対象とした。ヨルダンの正式名称は「ヨルダン・ハーシム王国」であ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

り、そのハーシム王家は預言者ムハンマドから脈々と連なる血筋を誇る。宗派・宗教間の対話において特にイニシアティブをとるのは、現国王アブドゥッラー2世とその従兄弟でありウラマー（イスラーム諸学を修めた学者）の資格も有するガーズィー王子である。国民のほとんどはスンナ派に属し、キリスト教徒も2～6%とされているが、両者は共存している。領土としても、GDPにおいても小国であるにもかかわらず、近年のヨルダンが發揮している宗派・宗教間対話におけるイニシアティブは、イスラーム世界全体の中で際立っている。私がまず足を運んだのは、主要な活動を担う NGO、The Royal Islamic Strategic Studies Centre（以下 RISSC）のアンマンにある事務所であった（写真1）。

中道を志す

RISSC は、宗派・宗教間の対話に関する出版物の制作・出版や、シンポジウム・ワー



写真1 政府系 NGO、The Royal Islamic Strategic Studies Centre の事務所玄関

クショップの開催を行なっている。RISSC は NGO ではあるが、ヨルダン王家との結びつきが非常に強い。ヨルダンにおける NGO にはしばしばあることだが、RISSC は王族の主導によって立ち上げられ、設立後も王族との関係が深い。王族と関係をもつことは政府との関係があることを意味する。ヨルダンは王国であり、政府・議会において国王アブドゥッラー2世が有する権限は強く、そのレジティマシーは王族のさまざまな宗教的・政治的・慈善的活動によって支えられている。こうした活動を目的とした NGO を王族が主導して立ち上げることも、その一環といえる。RISSC に勤め、私のインタビューに答えてくれたアシスタント・ディレクターは、「非政府組織だから政府からは資金提供はないが、国王個人からの資金提供がある」と明かしてくれた。また、RISSC からの出版物は、最終的にガーズィー王子の査読を経て出版されることもインタビュー調査から判明した。ここからも王族と当 NGO との関わりの深さが明らかとなった。

国家としてヨルダンが開始した主要な運動は2つある。2004年に始まった宗派間の対話を促す運動「アンマンからのメッセージ（The Amman Message）」と、2006年以降続けられている宗教間、特にイスラームとキリスト教との対話の必要性を説く運動「私たちとあなたたちの間の共通の言葉（A Common Word between Us and You）」である。いずれも前述の国王アブドゥッラー2世とガーズィー王子の主導により行なわれた。RISSC はこの2つを書籍として出版し、

いずれも当 NGO のホームページにおいて PDF 版で無料公開されている。

RISSC の目標には、ワサティーヤの実現が挙げられている。ワサティーヤとは、アラビア語で穏健、中道を意味し、英語では moderation と訳される。近年はいわゆる「過激主義」がクローズアップされているが、それと対置される概念である。当 NGO でのインタビューにおいてこのことについて尋ねると、次のような比喩を話してくれた。「人間の手は、真ん中にある中指が一番長い。これと同じで、何事も中道が至高なのだ。」アルカイダや IS などの「急進派」、「過激派」の勃興以降、いわゆる穏健派、中道派の重要性が叫ばれている。この比喩は、中道の重要性を強調することばのひとつとして興味深いものであった。

イスラーム ≠ 暴力

「アンマンからのメッセージ」と「私たちとあなたたちの間の共通の言葉」の 2 つの運動の中で行なわれたのは、宗派・宗教間の対話の必要性をクルアーンや聖書に則って論じ、それに対する賛同を募ってコンセンサスを形成するというものであった。これらは複数の国際会議で国王によって提起され、宗派・宗教を超えて、各国の政府指導者や宗教指導者から賛同の署名を多く集めた。インターネット上でも署名活動が行なわれ、これは現在も続いている。

イスラームにおいてウンマ（イスラーム共同体）はひとつであることが自明視されている。もちろん国家は複数に分かれており、欧

米や日本などの非イスラーム国家にもムスリムは散らばっている。しかしイスラームにおいては、ムスリムの連帯が重要視される。ヨルダンの立場では、IS のように自分たち以外は不信仰者、異教徒であると断罪し（これをアラビア語ではタクフィールという）暴力に及ぶ行為は、このウンマの分断を招く行為である。「アンマン・メッセージ」はこのタクフィールそのものを否定し、中道に基づく正しいイスラームのあり方について語ることでウンマ全体のコンセンサス形成を図っている。

「共通の言葉」では、イスラームとキリスト教の共通点として「神への愛」と「隣人への愛」が挙げられる。イスラームを暴力的な宗教とみなす批判に対して積極的な反論を行なうものである。ヨルダンは、国内のキリスト教徒マイノリティとの共存が実際に成功していることをアピールし、「共通の言葉」イニシアティブに説得性をもたせている。私はその真偽を確かめるべく、キリスト教徒が多く暮らす都市マダバへ足を運んだ。

ヨルダンとキリスト教

マダバへは、首都アンマンからバスで 1 時間ほど南に下る。朝夕にはキリスト教会の鐘の音が響き、レストランでは各種のワインが売られている。マダバで最も有名な教会は聖ジョージ・ギリシア正教会である（写真 2）。この教会の内部の床には、19 世紀に教会の建設過程で発掘され、6 世紀頃に作成されたと推定されるモザイク画地図が残されている（写真 3）。地図中には当時の聖地エルサレムの様子も詳細に描かれており、考古学



写真2 聖ジョージ・ギリシア正教会外観



写真4 アル＝マグタスにて、ヨルダン政府が整備を行なったイエス洗礼の地。



写真3 聖ジョージ・ギリシア正教会内部

的史料としての価値も高い。マダバはヨルダンにおける観光スポットのひとつであり、欧米からの観光客も多くみられた。

地元で土産物店を営む60～70代の男性に、「ヨルダンでのキリスト教とイスラームとの関係について知りたい」というと、店の玄関先に椅子を2脚出し、店の奥からお茶を入れて持ってきてくれた。話をしてみると、彼はキリスト教徒で、マダバに生まれ育ったという。イスラームについて話を振ると、近年のISによるヤズィーディー教徒迫害に心を痛めている様子で、イスラームは良くない、

キリスト教こそがよい宗教、と語る。「では、ムスリムばかりのヨルダンでは暮らしぶらいのか」と尋ねると、「ヨルダンでは国王のおかげでキリスト教徒も平和に暮らせるのだ」と答えた。社会的共存はともあれ、政治的には王政の下で共存が保たれていることについて、一定の評価をしている様子が窺えた。

ヨルダンには近年、キリスト教徒が好んで訪れるような観光スポットがひとつ増えた。それはマダバから車で西に約1時間走った所にある、ヨルダン川に面した都市マグタスである。ここでは近年発掘作業が進められた結果、イエスの洗礼の地としての考古学的価値が認められ、ヨルダン政府による整備も行なわれ、さらにヨルダンの申請により2015年に「ヨルダン川の向こう側、ベサニア（アル＝マグタス）」として世界遺産に認定された（写真4）。国王アブドゥッラー2世とガーズィー王子は、この地にローマ教皇やギリシア正教会司教など諸派のキリスト教指導者を何度も招き、ヨルダンがキリスト教徒、及びキリスト教遺産の保護者としての役割を果た

していることを強調している。

ヨルダンのキリスト教遺産保護はヨルダン国内にとどまらない。隣国イスラエルの占領下となっている聖地エルサレムの保護について、ヨルダンは影響力をもち続けている。岩のドームやアクサー・モスクの保全に加えて、同じくエルサレムに位置する聖墳墓教会の再建を行なったのはヨルダンである（写真 5, 6）。イスラームとキリスト教の平和・共



写真 5 エルサレムにて、聖墳墓教会外観。



写真 6 聖墳墓教会内部。イエスが埋葬され 3 日後復活したとされる石墓。

存を説くメッセージを発するだけでなく、実際にキリスト教遺産を保護し、国内キリスト教徒との共存を行なってきたという事実は、そのメッセージに正当性を与えている。

ヨルダン王家の戦略としての「対話」

これらの「対話」はすべてヨルダン王家によって牽引されており、政治戦略としての意味合いが強い。政治戦略としての狙いのひとつとしては、王家の正当性を高め、国内外からの評価・支持を上げることが考えられる。ヨルダン王家は、預言者ムハンマドの直系の子孫であることをアピールし、聖地エルサレムの保護者として振舞い、そして国内外のキリスト教遺産を保護し、国内のキリスト教徒との共存にも成功していると主張する。さらに「アンマン・メッセージ」や「共通の言葉」イニシアティブにおいては中道派の正しいイスラームのあり方を説き、コンセンサスの形成においてリーダーシップをとる。もうひとつの狙いとして考えられるのは、他のスンナ派諸国との競争関係の中で、宗派・宗教間対話においてその存在感を高めることである。サウディアラビアやモロッコ、カタールなどもヨルダンと同様に「宗教間対話外交」を行なっている。それぞれの国がそれぞれの独自性を打ち出しているのだが、ヨルダンの強みはキリスト教を内に有し、「キリスト教の保護者」として自身の成功例を背景として平和的なメッセージを打ち出せるところにある。

さらにいえば、確かにこれらの動きは王家の政治的意図をもつパフォーマンスではあるものの、イスラームにおける穏健派、中道派

の真摯な試みとしての意義も確実に存在している。対立，暴力ばかりがクローズアップさ

れる一方で，このような対話を志す動きがあることも見逃してはならないだろう。

サッカーにみるパレスチナ人と難民

岡 部 友 樹*

チリのサッカーチームである *Club Deportivo Palestino* が背番号に歴史的パレスチナの地形を模った「1」を使用し，話題を呼んだことはあまり知られていない。このチームはもともとチリに移住したキリスト教徒のパレスチナ人が主体となり 1920 年にサンティアゴで結成したものである。また Bank of Palestine がこのチームのスポンサーとなり，近年ではパレスチナ西岸地区へのツアーを企画するなど，国際的なつながりを強めている。サッカーという世界中に広がった庶民の親しみのあるスポーツは，国境を越えて人々のアイデンティティを想起させる。そして本稿で描くヨルダンのパレスチナ難民とイスラエルのパレスチナ人は，サッカーというレンズを通すことによって異なるアイデンティティの表出の仕方がみられるのである。

筆者は現在東アラブ地域（現在のシリア，レバノン，イラク，パレスチナ／イスラエル）におけるパレスチナ難民に関して研究を行なっている。本稿では 2016 年 8 月～10

月にかけてのヨルダンおよびパレスチナ／イスラエルでのフィールドワークをもとに，サッカーを通してパレスチナ人のアイデンティティの一側面を検討したい。

9 月 3 日日曜日の正午，私はヨルダンの首都アンマン郊外のアシュラフィーエの丘に登ったところにあるワヘダート難民キャンプに赴いた。アシュラフィーエの丘からは首都のアンマンを一望することができ，近くには赤十字病院や，少し歩くと 18～19 世紀に強



写真1 日曜日のワヘダート・キャンプのスク
の様子

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

制移住させられたチェルケス人が作ったというアブー・ダルウィーシュ・モスクがある。もともとワヘダート難民キャンプは 1948 年に起こった第一次中東戦争の際に、難民となったパレスチナ人を収容するために 1955 年に作られたものである。

このキャンプはパレスチナ解放運動の前線基地としての歴史をもっている。ワヘダート難民キャンプはパレスチナ解放機構（PLO）やパレスチナ解放人民戦線（PFLP）の根拠地となっており、1970 年に起こったヨルダン政府とパレスチナ解放勢力間の内戦（通称「黒い九月」事件）を境に、それらの勢力はレバノンへと追放された。また UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）によれば、キャンプの正式名はアンマン・ニュー・キャンプであるが、「俗称」としてワヘダートと呼ばれている。もともとアラビア語の「ワヘダート」（waḥadāt）は 1 つの単位すなわちユニットを意味し、当該キャンプが 0.48 平方キロメートルの狭い土地に人々が混住する場所であったことに由来する。そこから現地の方言によって「ワヘダート」難民キャンプと呼ばれるようになった。現在ではその景観からして「キャンプ」というよりも、アンマン郊外の一角といったほうが正確であり、訪れた日が日曜日であったためにスーク（市場）は多くの人々に賑わっていた。

パレスチナ解放運動が残した戦跡は、現在の平穏なキャンプの日常からは想像しがたいが、現在パレスチナ人のアイデンティティは解放闘争とは別の形となって現れている。そのひとつとして 1956 年に作られた「アンマ

ン・ワヘダート・スポーツクラブ」のサッカーチーム「Al-Wahdāt」がある。このチームは難民キャンプで結成され、メンバーも大半がパレスチナ人であることから、ヨルダンのパレスチナ人のみならず東アラブ地域に離散したパレスチナ人の支持を広く集めている。このチームは 1948 年以前から現在のヨルダン領に居住するトランスヨルダン系のサポーターが多い「Al-Fayṣal」というチームとの 1986 年のある試合を契機に一躍有名になった。

当時の状況は 1970 年のヨルダンでの内戦を経て、両者の対戦はパレスチナ人への警戒心が依然として強く、警官が多数見守る中で行なわれた。その試合では、徐々に力をつけて一部リーグにのし上がったパレスチナ側の「Al-Wahdāt」とトランスヨルダン側の「Al-Fayṣal」の間で扇動的なシュプレヒコール合戦となった。その結果、サポーターたちによる暴動が発生し、「Al-Fayṣal」側に 1 名の死者が出てしまった。パレスチナ側のサポーターには「我々はフィダーイーーン（パレスチナ解放戦士）だ」と叫ぶ者もあり、そ



写真 2 ヨルダンの難民キャンプ内にある UNRWA の学校でサッカーをする子どもたち

ここにはヨルダンにおいてパレスチナ人のアイデンティティを声高に唱道する新たな場としてのサッカーが現出したといえよう。この事実からパレスチナ側の暴力を見取るのではなく、むしろ着目されるべきは、これまでのパレスチナ解放運動に収斂されない多様な形態の「政治的な行動」の在り方である。

次にイスラエル・アラブのサッカークラブ「Ittihad Abna' Sakhnin (以下 Sakhnin)」をみていきたい。筆者はヨルダンから陸路でイスラエルに移動し、10月の初めには地中海を臨む北部の都市ハイファに1週間ほど滞在した。そこで泊まったホテルの管理人のひとりである青年は赤いクーフィーヤ（アラブ地域の男性が頭や首に巻く民族的装身具）を首から下げて、自らをイスラエルに住むパレスチナ人であるといい、私に「Sakhnin」というサッカーチームを紹介した。

1948年のイスラエル建国によってパレスチナ人が周辺の東アラブ諸国に離散したが、その中でも一部がイスラエル領内に残り、現在ではイスラエル総人口の16%を占める100万がいる。イスラエル国籍をもちながらもアラブ市民またはパレスチナ人として生きる人々はアラブ・イスラエルと呼ばれている。彼らは北部のガリラヤ地方に多く居住しており、その中でも筆者が訪れたハイファはムスリムとキリスト教徒が混住して、アラビア語とヘブライ語が混交して話される多文化・多言語都市である。ハイファから西に70キロほど行ったガリラヤ地方の中心部



写真3 映画 After the Cup: Sons of Sakhnin United (2009) のポスター

に位置するサハニーンという町は、上述のサッカーチーム「Sakhnin」を擁し、ムスリムが大半を占めて10%ほどのキリスト教徒が住む町である。この町が有名になったのは1976年3月30日に起きたイスラエル政府による土地の接収に対して抗議したアラブ人6人が死亡した事件を契機とする。この事件は「土地の日（Land Day）」と記念されており、死亡した6人のうち3人がサハニーン出身であったために、この町は土地に対する闘争のメルクマールとなった。さらに「土地の日」を象徴するように6人の殉教者のモニュメントがサハニーンを中心部の墓地に建てられている。

そのような町にできたサッカーチームである「Sakhnin」は「Ha-po'el Sakhnin¹⁾」(1961年設立)と「Maccabi Sakhnin²⁾」(1966年設

1) 「Ha-po'el」は労働者を意味している。また、ヒスタドルート（ユダヤ人労働総同盟）からの金銭的な支援を受けており、労働シオニズム政党のマパイに近い富裕層が支持していた。

立) が 1992 年に合併して出来たチームである。このチームはイスラエルのプレミアリーグ一部に昇格を果たし、国内でも屈指の実力を誇る。その活躍ぶりから最近ではこのチームの活躍を象徴する映画も作られている。その映画の中ではイスラエルの首相を務めたシモン・ペレスが登場し、アラブ人とユダヤ人の共存を「Sakhnin」に求めている。

「Sakhnin」のサポーターは、イスラエル右派の支持者が多い「Beitar Yerushalaim (Jerusalem)」と対戦した際に、ヨルダンの場合とは異なる様相を呈した。試合に警官は動員されたものの、暴動は起こらず、「Beitar Yerushalaim」側の扇動的な声援にもかかわらず、沈黙を保ったのである。「Al-Wahdāt」と「Sakhnin」において集合的アイデンティティの表出の仕方がサッカーという共通項を通じて異なる。前者はヨルダンに限られないパレスチナ・アイデンティティを主張するのに対して、後者ではパレスチナよりもむしろサハニーンという土地に刻印されたアイデンティティつまりローカリズムが強く主張されている [Sorek 2007]。後者にはとくにイスラエル・アラブとしての「配慮」または「生存戦略」があるともいえる。すなわちサッカーが民族主義的な主張の場となるという一般的なテーゼがあるとしても、その射程はイスラエル国家という枠組みによって制限されており、あえて紛争や対立を煽るような宣伝はしないというのがイスラエル・アラブ側の

生存戦略または現状としてそうあるのである。

サッカーに限ればイスラエル・アラブはパレスチナ・アイデンティティを押し殺しているように映るが、その一方でハイファの滞在先で出会った青年のように「パレスチナ人としての誇りを忘れない」ためにパレスチナを表象する赤いクーフィーヤを巻き、アラビア語を積極的に使うことによって「占領者」の言語であるヘブライ語の侵食に抗する姿勢をみせる者もいる。故アラファト PLO 議長は「いつの日か我々が声を失くしたとしたら、Al-Wahdāt が我々の声となるだろう」と喝破したという [Tuastad 1997]。2カ国でのフィールドワークを通じてパレスチナ人のアイデンティティを取り巻く環境をサッカーという視点から垣間見ることができた。今後の研究では東アラブの国家がマイノリティ（とくにパレスチナ人）をいかにコントロールしており、それに対してマイノリティ側はどのように懐柔・対抗しているのかという双方の点を具体的に検討していきたいと思う。

引用文献

- Sorek, T. 2007. *Arab Soccer in a Jewish State: The Integrative Enclave*. New York: Cambridge University Press.
- Tuastad, D. 1997. The Political Role of Football for Palestinians in Jordan. In G. Armstrong and R. Giulianotti eds., *Entering the Field: New Perspectives on World Football*. Oxford: Berg Publishers, pp. 105-122.

2) 「Ha-po'el Sakhnin」のライバルであるスポーツ組織によって作られ、低所得層が支持していた。また、このクラブのサポーターは、アラブ人とユダヤ人の共存を訴えて反シオニストを掲げるイスラエル共産党の支持者が多かった。

タイ人と魚の距離感から考える生物多様性

友 尻 大 幹 *

チャオプラヤ川はタイ北部の高地を起源とする川で、全長約 372 km、流域面積約 160,000 km² の大河川である。タイの北部から中部にかけて流れ、首都のバンコクを流れて最後はタイ湾に注ぐ [Molle 2007]。「水に魚あり、田に米あり」といわれるように、チャオプラヤ川には 2 cm 程度で成魚になるハゼ *Gobiopterus chuno* や、小型から大型のコイ類やナマズ類、最大 400 kg を超える淡水エイ *Himantura chaophraya* まで 300 種を超える多様な魚類が生息している [Kottelat 1989]。

バンコクを含む複数の都市が位置するチャオプラヤ川の下流域は広大なデルタを形成している。かつては洪水を繰り返すただ広大な後背湿地であったチャオプラヤデルタは、19 世紀後半に人の手によって縦横無尽に無数の運河を掘ることで稲作と居住が可能な空間へと変化した [高谷 1982]。現在では、経済発展と開発の影響を受けて急速な都市化が進んでいる地域でもある。

チャオプラヤ川下流域の魚類資源が豊富な背景もあり、かつてよりその流域の住民たちは日常的に魚類資源を利用してきた。タイの魚醤であるナンプラーや、ナギナタナマズ類からつくられた練り物、カレーや干物など、

その利用方法はさまざまである [公益財団法人長尾自然環境財団 2013]。東南アジア有数の大都市であるバンコク周辺でも、地元住民の人々が食べるための魚を運河のような身近な水辺で採集している光景を容易に目にすることができる。

私はこのチャオプラヤ川下流域の外来魚について研究している。外来魚とは「意図的もしくは非意図的に本来の生息域外に人為的に移動させられた魚種」のことであり、日本というブラックバスやブルーギルがよく知られている。研究内容は外来魚が在来生態系へ及ぼす影響や住民による利用状況を明らかにするというものであり、フィールドでは主に生物の採集や地元の人々への聞き取りをしている。

外来魚は生物の絶滅を引き起こす要因のひとつとして認識されており、外来魚研究とは生物多様性の保全や重要性について考えるテーマでもある。当然、私も外来魚研究を通して生物多様性の重要性について考えている。そしてその中でいつも悩むことのひとつが、生物多様性の重要性をいかに一般の人たちに伝えることができるのか、ということである。多くの研究者や専門家は生態系サービスなどといったさまざまな理論やモデルを並

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

べてその重要性を指摘するのだが、一般の人たちが十分に理解できるように説明できているものはないように私は感じている。そんなことを考えている中で、タイにおけるフィールドワークは生物多様性の重要性を理解するうえでのヒントを教えてくれた。それは、本来あるべき人と生物の距離感である。

タイ人ドライバーの採集技術と識別能力

私の研究は魚が対象で、まずは魚を採集しないことには何も始まらないので採集に出かける。調査にはいつも同じタイ人が同行してくれる。採集日の朝、彼と合流してその日の採集候補地点を地図上で確認したら最初の採集地点に車を走らせる。

調査地点に着くと水質を測ったり周囲を観察・写真撮影したりした後に、魚の採集を開始する。投網を地上から投げたり、刺し網をはったり、時には茶色く濁った水に首まで浸かりながらタモ網やサデ網を用いてありとあらゆる魚を採集する。この時、ドライバーがいつも採集を手伝ってくれるのだが、彼がとつもなく魚をとるのが上手い。研究者の知

り合いに魚の採集が上手い人はいくらでもいるが、彼にかなう人はいないだろうと思う。

ある日、私が投網を投げようとしていると、ドライバーが「まだだ!」と言った。そして数秒水面を見回して「今だ!そこに投げろ!」と言うので言われるままに投網を投げると驚くほど多くの魚が入っていた。

彼は普段、市場で鶏肉を売っており漁業を専門としているわけではない。彼曰く、「タイ人は魚を食べるから、みんな子どものころに魚をとったことがある。こんな所作は特別なことではない」とのこと。私も魚の採集に自信はあったのだが、何食わぬ顔で次々と魚をとる彼を見て採集技術に自惚れていた自分が恥ずかしくなってしまうほどであった。彼らにしてみれば魚をとるなんて庭の畑から大根でも抜いてくるようなものなのだろう。

また、彼は魚を見分ける能力にも長けている。採集した魚の種類名をその場で全て言い当てるのである。もちろん学名を言い当てるわけではないが全ての魚種にはタイ名があり、これまで数十種の魚を採集したが彼はそれらを見て瞬時に名前を言い当てることができた。時には「これは美味しい魚だから少し分けてくれ」とまで言ってくる。地元の人間なのだから当然だろうと思うかもしれないが、身近な魚の和名を言える日本人がどれだけいるだろうか。おそらくかなり生き物が好きな人でもない限りほとんどの魚の名前を知らないだろうし、ましてやそれが美味しい魚かどうかなんて知る由もないのではないか。

彼の能力は天性のものでもなければ必死で資料から得たものではない。魚をとるのが上



写真 1 投網を投げるドライバー

手いのは、それが自らの食料になるからである。魚の種類を知っていることは、それが食べることができる魚なのか、危険な魚なのか、といった利用するうえで必要なことである。つまり彼の能力は生きるうえで自ら日常的に食べるものを得るうえで必要な能力であり身近な環境にいる生き物を食べるうえで自然と得た術なのである。

地元の人々とのやりとり

フィールドで魚を採集していると、見慣れない外国人が魚をとっては奇妙な器具で計測したり謎の液体に漬けたりしているので、興味をもった地元の人々がわらわらと私を見に集まってくる。その際に、彼らはその水域のことやそこで採集できる魚のことを教えてくれるのだが、その詳細さにいつも驚かされる。

私は自分の研究の一環で胃内容物の分析をしている。要は胃の中身を直接観察して研究対象魚が自然下で何を食べているのかを調べるのである。80%のエタノール中に保存されている魚の胃を解剖し、さまざまな餌資源の出現頻度と体積比を算出する。この方法によって、対象の魚にとってどの餌がどのくらい重要なのかを分析することができる。私の研究はナイルティラピア (*Oreochromis niloticus*)、モザンビークティラピア (*O. mossambicus*)、そしてマヤンシリッド (*Mayaheros urophthalmus*) という3種の外来魚を対象としている。ざっくりとした胃内容物分析の結果を示すと、前2種はほとんど底生の堆積物を食べており稀に付着藻類を食べていた。残りの1種は主に魚の鱗と底



写真2 調査地における聞き取り調査の風景

生堆積物を食べており、あとは小型のエビやカニ、貝類といった水生の無脊椎動物を食べていた。

フィールドで地元の人たちと話していると、こうした分析から得られた魚の生態をことごとく言い当ててくるのである。とれた魚を目の前に「この魚は他の魚を追いかけまわして、鱗を食べているのを知っているぞ！この魚はエビとか貝を食べているだろ??」と次々と教えてくれるのだが、それらは科学的な分析と完全に一致しているのである。

彼らは私と同様の分析をしたわけではなく、ただ毎日水辺を見たり魚を食べたりしてそのようなことを知るのだろう。彼らが水辺に注意を向けているのは、やはり自分たちが利用する生き物がそこに生息しているからである。どの魚が美味しいのか、どこに魚が多く集まっているのか、そういったことを見て考える中で自然と体得するのである。

タイ人の魚との距離感から考えること

私がタイ人ドライバーの採集技術や識別能力、地域住民の人々の観察眼に驚くのは、そ

れが特別なことだと感じたからである。しかし、それは彼らにとっては生きるうえで当然もっている能力であり、何も特別なものではない。彼らは身の周りの環境にある資源（生き物）を利用しているだけである。おそらく、その状態は環境や生物相の変化に伴って動的に変化しながらも脈々と維持されてきた人と魚（生き物）の関係である。そして私は、この人と生き物の距離感こそが生物多様性の重要性に関わるヒントであるように考えている。

生態学では、ある生物が別の生物の生活に及ぼす影響のことを（生物）相互作用という。生物多様性はその生物相互作用によってつくられるネットワークのうえに成り立っており、その構成員である生き物たちは直接的・間接的に全てが関わりあって生きている。そしてフィールドで魚を利用するタイ人を見ていると、このネットワークには人もまたその中に属しているということに気づかされるのである。つまりは、人もまた生物相互作用のネットワークの一部を担っており、そのネットワークに属しているからこそ生きることができるのだ。

日本に暮らしていると、この本来あるべき

生き物と自分たちの距離感を知ることはとても難しい。しかし、自分たちも生物ネットワークに含まれているというその距離感をイメージすることができた時に、生物多様性の重要性が少しは伝わるようになるのではないだろうか。

これは、対象の生物に固執せずに地域全体を見渡すフィールドワークを行なったからこそ気づくことができたことである。これから生物多様性について、フィールドでの実体験から考えることを続けていきたいと強く思う。

引用文献

- 高谷好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展』創文社.
- Kottelat, M. 1989. Zoogeography of the Fishes from Indochinese Inland Waters with an Annotated Check-list, *Bulletin Zoologisch Museum* 12(1): 1-55.
- 公益財団法人長尾自然環境財団. 2013. 『メコン河流域水辺の幸 インドシナ市場図鑑』.
(http://www.nagaofoundation.or.jp/publication/documents/mizube_1.pdf)
- Molle, F. 2007. Scales and Power in River Basin Management: The Chao Phraya River in Thailand, *The Geographical Journal* 173(4): 358-373.

伝統的生業としてのバットファーム

櫻 庭 優 *

コウモリとの出会い

あれは大学院に入って1度目の渡航の時だった。カンボジア西部ボーサット州で行なわれた王立農業大学（RUA）主催のスタディツアーに参加した時だ。RUAの仲間たちと村の寺院の庭で昼休憩をとることになり、日陰を見つけるや否や鞆に入れて持ち歩いていた弁当を広げた。しばらくすると庭を歩きまわっていたひとりの男子学生がこちらにむかって走ってきて、私たちに何かを訴えかけている。それに反応した数人が弁当を放り出して、彼の指さす方へと一緒に走っていく。私も何が何だかわからないまま、彼らの後を追いかけた。やがて立ち止り、皆が寺院の森の上を指さし興奮した様子で騒いでいる。その方向を見た時、「あっ」と思わず大きな声

が出た。コウモリだ。今までに見たことのないほど大きなコウモリが寺院の大木の至る所に、数えきれないほどたくさんぶら下がっていたのだ（写真1）。キイキイと鳴きながら手をバタつかせているその光景は壮観で、私はすっかり魅せられてしまった。

コウモリと胡椒農園

首都に戻ってからも、あのコウモリの大群が忘れられず、本来の研究目的を逸脱して熱帯コウモリについて調べることに夢中になった。初めはインターネットから情報を集め、あの群が熱帯の果物を食すオオコウモリだとわかってただけで嬉しかった。しかしやがて、専門家に確認したいと思うようになり、学術的にも深めてみたい気持ちになっていった。

そんな作業を続けているうちに、とあるホームページに記載されていた「カンボジアでは伝統的にコウモリの糞が肥料として胡椒農園に施肥されてきた」（Cedar Farm Corporation 社長ブログより〔Cedar Farm Corporation Ltd. 2014〕）という内容に非常に興味をもった。コウモリの糞を肥料として作物に与えることにより、育ちが一段と良くなり、胡椒の風味まで良くなるとそこには記されていた。本当にそんな事があるのだろうか。こんな疑問



写真1 ボーサットで見たオオコウモリの大群

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を抱いているうちに、幸いなことにカンボジア胡椒ブランドの先駆者である KURATA PEPPER の倉田浩伸社長にインタビューをさせて頂けることになった。倉田さんによると、以前は同社農園でもリン成分を多く含むとされるコウモリの糞を市場で購入し、ごく少量だけ施肥していたそうだ。しかし現在はその糞の肥料の価格の高騰と、代用できる安い肥料があることから、わざわざコウモリの糞を利用する必要がなくなったということである。また、糞の肥料が風味に関わるのかどうかについては、特に聞いたことは無いが、胡椒に限らずさまざまな作物の生育を促進する効果があるらしいということであった。このインタビューより、少なくとも、カンボジアでコウモリの糞が肥料として人間に利用されてきたことはわかった。

バットファームの存在

続いて、カンボジアのコウモリについて詳しく知るために、東南アジアでのコウモリ生態研究の第一人者であり、王立ブノンペン大学 (RUPP) に所属されているネイル・フレイ博士を訪ねた。フレイ博士によると、コウモリ目はオオコウモリ亜目とコウモリ亜目に分けられ、オオコウモリ亜目はオオコウモリ科の 1 科のみが属すのに対し、コウモリ亜目には 17 科も属している。多くが食虫性であるが、中には植物食、肉食、血液食など、さまざまな食性の種も存在する。東南アジアにおいては食虫小型コウモリが稲作害虫駆除に貢献していることもわかっているそうだ。カンボジアのコウモリ亜目の住処はお

およそ 3 つに分けられ、1 つは鉱山の洞窟、2 つ目はパゴダ (寺の中)、そして 3 つ目がコウモリの糞を採取するために人が作った“バットファーム (クメール語で *Kasethan Procheav*)”だと教えて頂いた。つまり、伝統的にコウモリの糞が作物の施肥に利用されてきたように、昔からそれを集めて売ってきた人々もいるのである。

バットファームの現状

バットファームとは一体何なのか。1960 年頃バットファームの存在が認められたのはカンボジアとベトナムの 2 カ国のみ。その他の熱帯地域でもコウモリの糞を肥料として利用する文化は存在するものの、バットファームと呼ばれるものはないという。カンボジアのバットファームはパルミラヤシをそのまま利用して巣を作る形式であるのに対し、ベトナムはヤシの葉を利用して小屋のような形状のバットファームを作るという。フレイ博士によると、バットファームの存在はコウモリの生態にとっても大切であり、その文化を残すことがカンボジアのコウモリの保全にも繋がるのではないかと考えておられた。

フレイ博士はさらに、コウモリ分類学者のサヴェング・イス先生を紹介してください、イス先生はかつての学生がバットファームを調査して執筆した修士論文を読ませてくださった。それによると「バットファームとは人がコウモリの巣を作り、そこにコウモリを住ませ、巣の下に落ちてくる糞を収集する伝統的な生業のひとつである」[Chhay Sokmanine 2012] という。また、「1960 年

頃バットファームは存在していたが、ポルポトの時代が始まるとその文化は一度消え、戦争が終わった後の1980年に復活した。一時はカンボジア各地でみられた文化だったが、近年収入と支出のバランスが崩れたことと、コウモリの数の減少により、殆どの人が止めていった。文化の衰退に危機を感じたカンボジア政府は、2000年から2005年にかけてバットファームが盛んな州でその文化の保全のプロジェクトを行なった。」[Chhay Sokmanine 2012]とも記されていた。

バットファームの現状と課題

ますますバットファームへの関心が高まった私は、イス先生にお願いしバットファームがある村に連れて行って頂けることになった。行先は南部カンダール州で、人里離れた山奥の寺院の（広大な）寺領内の村だった。そういえば私が初めて出会ったコウモリの大群も寺院の中である。先生によると、寺院は木を切らずに大切に守っているからではないかという。

さて初めに会ったのは87歳の男性（写真2）。1953年にバットファームを始めたが、戦争中は止めて、1993年に再開したという。巣がある6本のパルミラヤシ（写真3）を見上げるとコウモリの姿は見えないが、わずかにキイキイという鳴き声が聞こえる。そして近づくと強烈な獣臭とアンモニア臭がした。巣の手入れはせずに放置しているため、巣に使用されているヤシの葉が老朽化し、コウモリが好むとされる芳香も失われ、年々コウモリ数は減り、糞の収量も減っているとい



写真2 老人とイス先生



写真3 パルミラヤシとコウモリの巣

う。毎日バケツ一杯の糞がとれたら良い方だとか（写真4）。不定期で糞を売っているが、平均すると1日に約10,000リエル（1ドル＝4,000リエル）儲けるという。主な収入源は作物の販売であるが、その作物の肥料にも使っておりゆくゆくはさらに沢山の作物を育てたいと考えているそうだ。確かにこの老人男性が住んでいる小屋の周りには見渡す限りさまざまな作物が植えられていた。美味しい有機野菜を育てているのだと、とても誇らしげな表情をしている。でも彼がどうやってこれほど高い木に登って巣を作ったのだろうと思い、聞いてみると、最近ではヤシの木に登れる



写真4 糞を集めるバケツ

人間が少なくなったから、木に登る専門の仕事をしている人を雇ったのだそうだ。そんな仕事もあるのかと驚いた。

そして、次に出会ったのは、山の頂上近くでバットファームを経営している家族だ。ここはパルミラヤシ 30 本から成り、効率的に糞を回収できるように木と木の間にネットを張り、巣も手入れが行き届いていた（写真 5）。巣の手入れとは、青い状態で回収したパルミラヤシの葉に日光を当てて乾燥させ、束ねて新しい巣を作り、木に登って巣を付け替える作業である（図 1 参照）。きちんと乾燥させたヤシの葉はコウモリが好む芳香を放つという。この家族はバットファームを生業として上手に運営しているようだ。

元氣な 65 歳の女性は、1980 年から家族とここでバットファームをしていると話した。糞はバケツ 1 杯で 7,000 リエルになるとい



写真5 30本のヤシに張り巡らされたネット

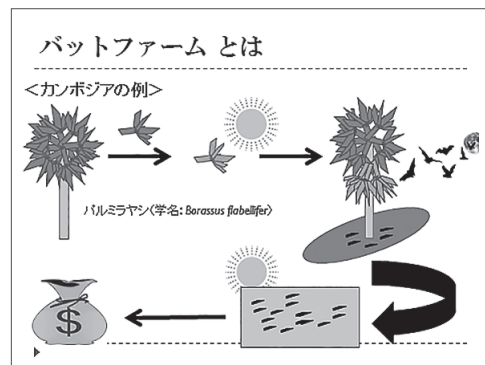


図1 バットファームの仕組み（作成者：櫻庭）
パルミラヤシの葉を回収→日光で乾燥させ、巣として束ねる→ヤシの木の緑の葉の下に取り付ける→コウモリが住みつき、糞が地上に落ちる→糞を回収し、日光で乾燥させる→肥料として売る。

う。乾季には 1 日 3～4 杯売り、雨季は 1～2 杯売ることができるという。コウモリの糞を売る以外には、お米や果物・野菜を栽培して売っている。コウモリの糞は肥料としても良いと考えていた。寺院でヤシをレンタルしているが、30 本で毎年 120,000 リエルという。バットファームの中で最も大切な作業は、糞を乾燥させる工程であり、これがきちんとできていないと、菌が繁殖し悪い肥料になってしまうのだと教えてくれた。その時



写真6 コウモリの糞を乾燥させている様子

ちょうど朝に回収した糞を乾燥させていたので、その様子を見ることができた（写真6）。強烈な臭いの中を、若い女性がせっせと手で糞を広げながら乾燥させていた。コウモリの糞は、大きいもので縦1.5～2 cm 横幅は0.5 cm 未満であり、色は黒一色だ。この辺に生息するバットファームのコウモリの種類は *Scotophilus kuhlii* だとイス先生に教えて頂いた。この家族は、皆生き生きとした笑顔に溢れていて、バットファームを生業として

続けていく意思が強いことが印象的だった。

さて、このように興味深いバットファームであったが、最終的に私はこれ以上の研究をすることはできなかった。これらの地域は治安に問題があり、相談した先生方から止めた方が良いというアドバイスを受け、調査許可の取得も難しいと指摘されたのである。しかし、カンボジアで有機農業が盛んになってきた今、バットファームはコウモリの保全と合わせて注目に値する存在である。これからも地域にその伝統が受け継がれていくことを願っている。

引用文献

- Cedar Farm Corporation Ltd. 〈<http://www.cedar-farm.com/about/>〉（2014年11月14日）
- Chhay Sokmanine. 2012. Cambodian Bat Farms: A Review of Farming Practices and Economic Value of Lesser Asiatic Yellow House Bat, *Scotophilus kuhlii* (Leach, 1821), in Kandal and Takeo Provinces, Cambodia. (M.A. Thesis submitted to Royal University of Phnom Penh)

断念した調査

—モザンビーク中北部の伝統的権威に迫る危険—

松井 梓*

晴れた日の朝

2016年10月19日の朝。モザンビーク北

部のナンプラ州は乾季真っ只中の快晴。ついに自分用のヘルメットを購入し（それまでは

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

郡¹⁾の日本びいきの農業局の方からいつも拝借していた)、意気揚々とバイクタクシーの後ろに乗って、予備調査の結果数日前に自ら決めた調査対象の集落へ向かった。今週末から約3ヵ月弱の間、集落のリーダーの家に泊めてほしいとお願いをするためだった。調査対象集落が含まれるローカリダーデ(localidade) Nの役場に着いてみると、ローカリダーデ長(chefe de localidade)以下の行政官らが会議を開いていた。すでに何度か会っていたローカリダーデ長が会議に招き入れてくれ、私が地域の伝統的権威ムエネ(muene)の家に泊まりたい旨を告げると、その場で皆さんが快諾してくれた。モザンビーク北部に居住するマクア人社会のムエネとは、同一血縁集団の構成員で形成されている集落を代表する伝統的権威であり、この地域では集落長(chefe de povoação)も担っている。ローカリダーデ役場の事務の女性と一

緒に週末にマットレスを町まで買いに行く約束をし、緊張と興奮に不安が入り混じった気持ちで滞在拠点にしていた町まで戻った。

その後滞在先のゲストハウスに到着し、注文してからなかなか来ない昼食を待ちながら、習慣となっていたモザンビークに関するニュースを専用に扱うウェブサイトのチェックを始めた。そこに不穏なタイトルがあった。記事を読み進め、出てくる地名を地図やインターネットで調べ、手が震えだした。手の震えの原因は、この日行ってきた集落の近くで、前日に野党レナモの党員2名が何者かに殺害されたというニュースだった。はっきりとした事件現場は分からないが、私がその日通った道のどこかである可能性も十分にあった。

モザンビークの国レベル・地域レベルの政治状況

ここで、現在のモザンビークの政治対立構造を理解するため、独立後から今日までの政治状況を概説する。モザンビークの現与党で独立戦争で植民地政府と戦ったフレリモ(FRELIMO: Frente de Libertação de Moçambique, モザンビーク解放戦線)と野党第一党のレナモ(RENAMO: Resistência Nacional Moçambicana, モザンビーク民族抵抗運動)は独立後の内戦(1977年~1992年)において対立した後、1992年に和平合

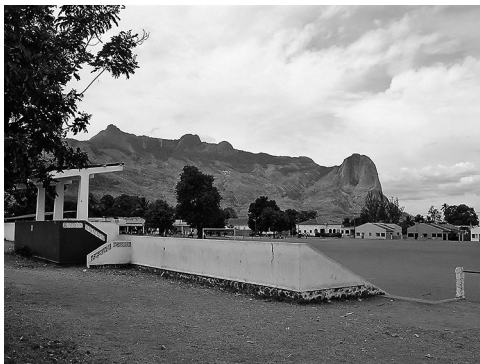


写真1 リバウエ郡都の象徴ンバルエ山

1) モザンビークの農村部の行政区分は、国以下、州(província)―郡(distrito)―行政ポスト(posto administrativo)―ローカリダーデ(localidade)―集落(povoação)―コミュニダーデ(comunidade)と分類される。ローカリダーデまではフレリモ党員が行政長に配置されているが集落及びコミュニダーデの長は選挙によって選出され必ずしもフレリモ支持者ではない。



写真2 ローカリダーデ役場からの景色



写真3 調査対象集落

意に調印した。フレリモは1994年の第1回国政選挙から現在まで政権を握り続けているが、現在までの5回の選挙で必ずしも毎回圧勝しているわけではなく、レナモもその得票が多いときには3割超の票を得ている。地域的にみると、特にレナモ成立の経緯から関わりが深いモザンビーク中部や筆者の調査対象地であるナンプラ州を含めたモザンビーク北部はレナモ支持率が高い地域である。

継続的に複数政党による選挙が実施され、紛争後平和構築の成功例とも評価されたモザンビークであるが、常に政情が安定しているわけではない。上述の各回の国政選挙や地方

選挙において選挙管理委員会がフレリモに優位な組織であり、その選挙結果に不正があったとレナモは主張し、これらを巡って両政党は対立してきた。特に2013年に発生した中部のソファアラ州におけるレナモ武装集団による国防軍施設への攻撃以降、レナモが1992年の和平合意を放棄するなど両党の対立姿勢は強まった。これを契機に、レナモ党首であるデュラカマが拠点を置くソファアラ州のほかマニカ州、ザンベジア州を含む中部地域を中心に、両党間の対立に関連した小規模な襲撃が散発的に発生した。レナモによる、警察や医療機関、道路を移動する車や石炭貨物列車などへの攻撃が相次いだ一方で、レナモの役職者が何者かに殺害される事件やレナモの党事務所が襲撃される事件も中部を中心に発生している。そしてこれらの攻撃が、2016年に入ってから北部のナンプラ州の主に農村部でも時折みられるようになっていた。

このような背景のもと、私の調査地の周辺でレナモ党員の殺害事件が起こった。もちろん、これがフレリモによるものという証拠はなかったが、事件後相談にのって頂いた農業局員も、現地の友人も、そして私自身もその可能性は高いと感じていた。真実がどうあれ、党員を殺害されたレナモによるフレリモ側の立場の人々への報復が起こる可能性があった。そしてその報復攻撃は、フレリモ党の役職者や議会の議員など外部からみて明白に党を代表している人物だけでなく、私が対象としていたローカリダーデや集落の内部の「フレリモ側の」伝統的権威やリーダーを標的に起こる可能性もあると私は考えていた。

レナモによる攻撃対象となる地域の伝統的権威やリーダーたち

フレリモ・レナモ相互の間での攻撃が発生していた一方で、モザンビーク中部では地域の伝統的権威やリーダーらがレナモによって攻撃される事件が起きていた。マクア人社会の伝統的権威は、集団が危機に瀕した際の移動の決定や人々の間の争い事の裁定などに大きな役割を有し、地域社会に影響力をもってきた。その人々への影響の大きさから、植民地政府は伝統的権威らを行政機構の末端に位置付け役職を与えた。独立後のフレリモ政権は、伝統的権威らが親植民地政府的であったとして彼らを周縁化し行政から排除し、それをみたレナモは権威らに接近し自陣に取り込んでいった。しかしその後フレリモは、国政選挙におけるレナモの得票の多さを目の当たりにして特に農村部において伝統的権威を味方につける必要性を痛感した。フレリモ政権は、2000年に地方行政の担い手として「共同体権威」なるカテゴリーを設置し、地方行政官やフレリモ党役員などと合わせて、伝統的権威を「共同体権威」の一画に位置付けた。こうして伝統的権威らは、フレリモとレナモ双方による奪い合いに巻き込まれていく。

上述のとおり、これまですでにモザンビーク中部では、農村地域内の伝統的権威や集落・コミュニティのリーダーらがレナモの攻撃の標的となる事件が多数発生していた。報道によればレナモは伝統的権威や地域のリーダーらを攻撃のターゲットのひとつとして位置付けており、その動機は「伝統的権威やリーダーらの権威を弱めるため」とされて

いた。しかしながら伝統的権威やリーダーらの中にはフレリモ支持者・レナモ支持者双方が存在しており、レナモがレナモ支持のリーダーらに対し攻撃や殺害を行なうとは考えづらい。ニュース記事や報道でレナモの伝統的権威・リーダーらの殺害の動機として語られる「彼らの権威を弱めるため」という言葉の裏には、フレリモ支持の伝統的権威を排除するという意図や、レナモ側の権威であったにもかかわらず2000年以降フレリモによって「共同体権威」として行政機構の末端に取り入れられ、給与の支給などの恩恵を受けたことにより親フレリモ化している伝統的権威らを粛清する意図があると考えられる。すなわちレナモによる伝統的権威やリーダーらへの攻撃は、報道にあるように単に伝統的権威の地域住民への影響力を恐れそれを弱めるために行なわれたわけではなく、その影響力の大きさ故に地域の伝統的権威やリーダーを自陣に取り込みたいレナモが、こちら側につかなければもはや安全ではないと彼らを脅迫する意図をもって行なったのではないだろうか。

断念した調査

調査対象地域では、ローカリダーデに複数名の伝統的権威やリーダーらがいた。一般的にこれらの「共同体権威」に就任する人々のうちフレリモ側の者とレナモ側の者の関係は悪く、レナモ側の者が会議から排除されるケースもあるという。しかし調査対象のローカリダーデではこのような傾向はみられず、伝統的権威や選出されたその他のリーダーらがフレリモ党员であるローカリダーデ長とも

良好な関係を築いていた。また、調査対象集落が位置する郡自体がナンプラ州の中でもフレリモ支持が強い地域であった。これらのことから、私はこの地域の権威らはフレリモ側の人たちであると踏んでいた。²⁾ 彼らに対する攻撃の可能性が考えられる中、レナモ党员殺害事件の直後にこの地域に滞在するのは危険であると考えて、悔いは大きかったが調査地を都市部に切り替えることにした。事件の3日後に逃げるようにして滞在拠点の町を離

れたが、始めたばかりの調査を投げ出しての退避は、後ろ髪を引かれるような苦い思いがした。

国レベルの政治対立は地域の内部にも不安定さを生んでおり、それは集落のレベルまで及んでいた。これにより、ローカリダーデNにおける私の調査は続行が困難となってしまったが、近い将来この地を再訪し、再び伝統的権威やリーダーらに話を伺うことができることを切に願っている。³⁾

2) 彼らがフレリモ側かレナモ側かを直接尋ねることはあまりにもセンシティブな質問であり、尋ねることはしなかった。

3) この後2016年末に両党党首の電話会談で2週間の停戦合意が結ばれ、その後期限付きの停戦合意が複数回延長された。2017年5月4日に無期限の停戦が宣言され、現在目立った攻撃や衝突はみられない。